敦煌写本「伍子胥変文」について

――その娯楽性――

伊藤美重子

はじめに

春秋時代の楚の賢臣・伍奢の息子・伍子胥（名は員）の仇討ち物語は、『史記』伍子胥列伝に記されている。楚の平王が太子の妃として迎える秦の穆公の娘の美しさを耳にして、佞臣・費無忌にそそのかされて自分の妃にしたことを伍奢が諫めたことに端を発す。父の伍奢と兄の子尚は殺害され、子胥は父と兄の仇討ちを決意して呉に逃れ、楚を伐ち、父兄殺害の怨みをすすぐ。そして呉と越の抗争のなかで、呉の佞臣・宰嚭の讒言により呉王から死を賜わり、悲劇的な最後を遂げる。伍子胥の故事は『春秋左伝』『国語』『戦国策』『呂氏春秋』『呉越春秋』『越絶書』などの歴史書のみならず、『楚辞』『荘子』『説苑』『論衡』などにも記載され、伍子胥故事は様々な変遷をたどる。(1)

敦煌文献にも伍子胥の話を書写する写本があり、「伍子胥変文」と擬題されている。伍子胥変文に関する初期の研究に、劉修業「敦煌本〈伍子胥変文〉之研究」（『天津大公報図書副刊』一九三七）(2)、蘇瑩輝「論敦煌本史伝変文与中国俗文学」（『東海大学図書館学報』第六期、一九六四）(3)、根本誠「中国文学の一特徴―伍子胥変文の人物描写の限界

性（上・下）」（（上）『東洋文学研究』一四、一九六六、（下）『同上』一五、一九六七）がある。

ディヴィット・ジョンソンの（David Johnson）〝The Wu Tzu-hsü Pien-wen and Its Sources（伍子胥変文とその起源）〟（Part 1, Harvard Journal of Asiatic Studies, Vol. 40-1, Part 2, Vol. 40-2、1980）[4]は、伍子胥故事、伍子胥信仰に関する多くの資料を提示して、伍子胥変文の特質とそこにみえる故事の来源について詳述する。伍子胥変文が民間の伝承を多く含む『呉越春秋』から多く取材し[5]、職業的な「説書人（storyteller）」に由来する可能性があること、伍子胥祭祀の影響を受けていることを指摘する。金文京「読書ノート「伍子胥列伝」と「伍子胥変文」――『史記』の神話と文学――」（福島正『鑑賞中国の古典　史記・漢書』（角川書店、一九八九）所収）は豊富な資料をもとに、伍子胥変文の神話性を詳述する。黄亜平「伍子胥故事的演変―史伝系統与敦煌変文為代表的民間系統的対比」（『敦煌研究』二〇〇三―二）は、『史記』伍子胥列伝、伍子胥変文、元曲『説専諸伍員吹簫』を比較検討する。

伍子胥故事はかなり早い時期から、歴史書のみならず各地での民間伝承や演芸・芸能の中で継承されており、その中において敦煌写本「伍子胥変文」は、民間での伍子胥物語の様相を伝える貴重な文献であり、伍子胥を主人公として様々なエピソードをつなぎ、聴衆の嗜好に合わせて創作されたと考えられる。変文は子胥を中心に展開する物語であり、先行故事を改変潤色し、語り物として聴衆を楽しませるための工夫や仕掛けを用意する。伍子胥変文は先行の故事をどう改変し、どのような工夫や仕掛けを用いているのか、本稿では伍子胥変文の娯楽性について検討したい。

伍子胥変文には、アーサー・ウェレー（Arthur Waley）の英語訳が〝Ballads and Stories from Tun-huang〟（London, George Allen & Unwin Ltd. 1960）に、入矢義高の日本語訳が『仏教文学集』（平凡社、中国古典文学大系六〇）にある。校録・校注本に、黄徵・張涌泉『敦煌変文校注』（中華書局、一九九七、以下『校注』と略称）、項楚『敦煌変文選注（増

訂本）』（中華書局、二〇〇六、以下『選注』と略称）がある。(6) 本稿での原文の引用は、原則として常用漢字を用い、欠字は□、〔　〕で示し、誤字は（　）に正す。文字の確定や語釈は『校注』、『選注』、入矢訳などを参照する。

一　鈔本について

伍子胥変文の鈔本は次の四点あり、ともにタイトルおよび識語を欠く。各鈔本について、存行数、首部と尾部、参照に備え『選注』での該当頁数を付記する。

①P三二一三。存二八行。「昔周国欲末、六雄競起、八□諍侵。～何得信受魏陵之言（三～四頁）」

②S六三三一。存一三行〔上欠〕「孝之心、□来救吾之難、～由如鈍鳥盪、泉魚〔下欠〕（一一）」

③S三二八。(7) 存三七三行。「今却返具述胥言～朕夢見忠臣仵（伍）子胥言、越将兵来〔下欠〕（一四～一二四）」

④P二七九四ⅴ。存九三＋二＋三七行。「喚言仵（伍）相物（勿）懐擬（疑）～還是諸天威力化（二二～五五）」（空白）「欲如何、遂擲宝鍼（剣）於江中、放神光光而煜（煥）爛、江神遥聞鍼剣時（五六・五七）」、（空白）、「悲歌而嘆曰、大江海兮淼無辺～遂乃身軽体健、踴躍不（空白）（五九～七五）」

①の首部は最初の行に二、三字分の欠落（空白か）があり、「昔周国欲末」と始まり、尾部は「何得信受魏陵之言」で書き止められ、一行分の空白のあと、異なる筆跡で別の文献が書写される。(8) ①には、楚の名君・平王と賢臣・伍奢、その息子で鄭の臣の兄・子尚と梁の臣の弟・子胥の紹介で始まり、平王の太子の嫁取りにまつわる事件が書写され、伍奢が平王を諫める場面で終わる。この事件は『左伝』昭公十九年にすでにみえ、『史記』伍子胥列伝（以下「列伝」と略称）にも記載される。(9)

②はT字型に切り取られたような紙片で、中央六行の全文は残るが、前四行と後三行は下半分が欠落する。②

には兄の子尚が父からの呼び寄せ状を受け取り、楚行きを決め子胥に会いに行くが、子胥は書状は偽で自分は行かぬという場面が整った筆跡で書写される。列伝には伍奢の書状の記載はない。[10]①と②の鈔本の内容から、伍子胥変文の冒頭部分の内容が得られる。

③は首部と尾部が欠けてはいるが、伍子胥変文の大半が、端正な筆で書写される。

④の紙表は「大乗四法経論及広釈開決記　大蕃国大徳三蔵法師沙門法成集」と首題があり、末尾に「癸丑年八月下旬九日於沙州永康寺集畢記」の識語がある。李正宇によると「永康寺」は、吐蕃占領期にのみ見える名であり、「癸丑年」を八三三年に推定している。[11]伍子胥変文はその紙背に書かれ、筆跡が異なる三つの抄写から成る。最初の抄写は比較的整った筆跡であるが、後に行くにつれ書き方が乱れる。二番目は二行のみの習字、三番目は大きさが不揃いで硬い印象の筆跡である。この鈔本には③S三二八と同じ場面の書写があるが、③にはみえない語句や文が挿入され、③の表現により躍動的な描写を加えている（後出）。④は③とは異なる系統の伍子胥変文を抄写したものか、あるいは抄写者が加筆したものなのかは、鈔本の性質を考える上で重要な問題である。

①②③には重複する部分がなく、①②③の順にストーリーが展開しており、幾分の欠落があるものの、①②③で伍子胥変文のほぼ全文が得られる。

二　エピソード構成について

伍子胥変文（以下「変文」と略称）は伍子胥を主人公にして相手役を変えながら物語が進行する。先述のように、P三二一三、S六三三一の鈔本には物語の冒頭部分がみえ、伍子胥の逃走の発端となる事件が描かれる。S三二八は首部が欠落してはいるが、伍子胥物語の大半が残る。そこでS三二八の鈔本について、伍子胥物語の構成を

検討してゆく。

S三二八に含まれるエピソードについて、その場所（場所の移動がある場合は「↓」で示す）と子胥以外の登場人物、『選注』での当該部分の頁数を付し、その場面の概要を記す。

①楚の国↓莽蕩山。平王、使者、伍奢、子尚。（一四～一九）

楚の使者が平王に伍子胥の仇討ちの意志があるのを報告すると平王は怒り、伍奢と子尚を殺害する。勅令で子胥捕縛に賞金をかけ、楚では血眼になり子胥を探す。子胥は莽蕩山に逃れ、剣を撫し悲歌する。

②潁水のほとり。紗を洗う女。（二〇～二三頁）

潁水まで逃げ落ち、川辺で紗を洗う女と出会う。女は憔悴した子胥の姿をみて食事の提供を申し出るが、子胥はそれを断る。女の再度の勧めに川辺で食事をとった子胥は、女に真実をあかし口止めをする。女は子胥の身を安んじながら、石を抱いて川に身を投げる。子胥は慟哭する。

③川のほとり。子胥の姉、二人の甥（子安、子永）。（三三～三七）

川のほとりの一軒家に食を求め立ち寄る。婦人がわが弟と知り食事を出す。姉は弟の宿命を嘆き、子胥は仇討ちの決意をあらたにする。甥たちの追跡を、子胥は予見し術を使って逃げのびる。

④川のほとり。子胥の妻。（四〇～五五）

川のほとりの一軒家で食を乞う。妻が出てくる。子胥はそしらぬ顔で食を乞うが、妻はすぐに夫だとわかり、薬の名を織りこんだ会話で確かめるが、子胥は最後までしらをきる。妻は子胥を他人としてもてなし見送る。子胥は二度と見破られぬよう、その特徴のある前歯を石で叩き落とす。

⑤呉江北岸↓莽蕩山↓呉の国。漁師。（五五～七四）

呉江の北岸に到着し広大な河を目にする。蘆に隠れていた子胥が、船をみつけ渡しを頼む。漁師は承諾し、子胥に食べ物をと家に戻る。子胥は疑念を抱くが、漁師が戻り食事をし船を出す。子胥はお礼に璧玉を贈るが漁師は受け取らず、宝剣を差し出すが断られて、剣を河に投げ捨てる。すると江神が現れ剣を子胥に返す。河を渡り終え、漁師は子胥に呉に行くよう勧め、呉王に認められる術を授ける。漁師に口止めすると、漁師は船を覆して死ぬ。子胥は慟哭し逃走を続け、呉国に到着する。

⑥呉の国→呉軍と楚軍の戦闘→平王の墓所→河岸。呉王、楚の昭王、魏陵。（七四～九〇）

呉に入り漁師の教え通りにし呉王との面会がかなう。子胥は呉の大臣となりよく国を治め、人々は子胥の仇討ちをかなえたいと兵士に志願し、精兵九十万が集まり出陣する。呉軍は昭王の楚軍に勝利し、昭王は降伏する。昭王から平王の墓所を聞き出した子胥は、墓を暴いて屍骸を取り出し、昭王と魏陵の心肝をえぐり取り、河岸で父と兄の霊を祭る。平王の骨は剣で切りつけると血を流す。子胥は平王の骨を焼きすて、昭王を切り刻み河に投げ込む。父と兄の遺骸を探したが見つからず、樹を植えて父と兄のかたしろとした。

⑦鄭の国。鄭王、漁師の子。（一〇五～一〇六）

子胥は兵を収めて、梁と鄭を討ちに行く。兄を見殺しにした鄭王に書状を送る。子胥の書状に恐れをなした鄭王は秘策の持ち主を求め、漁師の息子が名乗りをあげる。漁師の子はかつてその父が子胥を助けた時のように、船上に歌い子胥をおびき出す。子胥は漁師の子と知り子に詫びて、その子に免じ鄭王を許す。漁師の子は楚帝となり、楚と鄭の二国は太平となる。

⑧梁の国→潁水→姉の家。呉軍、梁王。二人の甥。（一〇八～一一〇）

梁に向かう。梁王はもてなしの用意をして呉軍を迎え、梁王の歓待をうけた呉の兵士たちは、梁王を許す

よう子胥に頼み、子胥は軍を引き上げる。潁水に至り、女の恩に報いるため百金を川に投げ入れて弔う。そして姉の家に向かい、二人の甥をとらえ奴隷とした。

⑨妻の家→呉の国。子胥の妻、呉王。（一一二～一一六）

妻を迎えに家に行くが、妻は子胥を家に入れない。子胥はかつて妻を欺いたことを何度も詫び、ようやく妻は子胥を許し、連れだって呉に帰還する。子胥の軍は呉に凱旋し、子胥は呉の宰相となる。

⑩呉の国。越王勾践、范蠡、越軍、呉軍、呉王夫差、宰嚭。（一一九～一二四）

越王勾践が呉へ征討の兵を出すが、子胥率いる呉軍に大敗し軍を引き揚げ越に戻る。呉王は太子夫差に子胥に従うよう遺言し亡くなる。呉王はある夜みた夢を佞臣・宰嚭と子胥に解かせる。呉が滅ぶという子胥の夢解きに呉王は激怒し、子胥に燭玉の剣を与え死を賜る。子胥は越軍が呉に攻め入るのをみたいものだと、自分の頭を城東の門に懸けるよう遺言し自死する。子胥の死後、越は粟四万石の借り入れを申し出、呉王は粟を貸す。越は蒸した粟を返し、呉では粟が実らず飢饉となる。呉が飢饉となって五年目、越王は呉に軍を出す。呉の民は餓え戦う気力もない。呉王は夜、越軍が攻めてきますよという伍子胥の夢をみる。

前半①～⑤では逃亡者の伍子胥が描かれ、後半⑥～⑩では呉の臣としての伍子胥が描かれる。

①の平王の使者が子胥を取り逃がして平王は子胥捕縛の勅令を出し、伍奢と子尚を殺害したこと、⑤の子胥を渡し助けた漁師がお礼の剣を受け取らなかったこと、⑥の呉が楚に勝利し子胥は平王の墓を暴いたこと、⑩の子胥が呉王夫差から死を賜り、頭を城東の門に懸け呉が越に滅ぼされるのを見たいと遺言したことなどは、すでに列伝にみえ、変文は大筋では『史記』を踏襲している。(12)

また、前掲のディヴィット・ジョンソンが指摘するように、変文は後漢・趙曄『呉越春秋』（以下『呉越』と略称）から多く題材をとり、列伝にみえる①⑤⑥⑩の場面の描写は、『呉越』ではより多くの描写が加わり、変文に類似する表現がみえる。[13] たとえば列伝では漁師の自死を記載しないが、『呉越』は子胥に口止めされて船を覆して自死する漁師を描き、変文に酷似する。[14] また、『呉越』には列伝にはない②の穎水の女が子胥を助けて自死する話、⑦の漁師の子が鄭を救う話、⑧の呉に凱旋する途中で穎水の女を弔い川に百金を投ずる話、⑩の呉が越に粟を貸し越が蒸した粟を返し呉が飢饉になる話などがみえる。[15] しかし、『呉越』で漁師の後に登場する女は変文では子胥が最初に出会う人物であり、『呉越』では子胥が鄭を討つのは、鄭王が楚の平王の太子建を殺害したことによるものであるが、変文では兄が鄭の臣であったことによるなど、『呉越』と変文では、人物の登場順や設定が異なる。[16]

変文はエピソードの多くを『呉越』に取材するが、意図的に改変している。変文ではあくまでも子胥を中心にして、複雑な人間関係を単純化しわかりやすくしている。兄の子尚を鄭の臣に設定し、鄭を兄の仇とすれば、漁師の子の話も取り込みやすい。漁師と女の登場順を変えたのは、子胥は当初越に行くつもりであるのを漁師の勧めで変更するという設定にしたからであり、それは長い逃走場面を創出するためであろう。子胥が仇討ちの固い決意を胸に秘め、飢えに苦しみながら、様々な人物に助けられ危機を脱出して、呉にたどりつくという展開にするためには、漁師の助けで呉江を渡り、呉に入る場面を前半の山場に設定するのが、効果的であると変文作者は考えたのであろう。更に呉江を渡るところで、「江神」を登場させ、子胥が投げ込んだ剣を「江神」が受け取り、子胥に捧げるという場面を加えている。[17]「江神」の登場の背景には当時の水神・伍子胥への信仰があるものと考えられる。[18]

『呉越』では、川辺の女に食を乞うていた子胥は、変文では女が子胥の憔悴の様子に声をかけて、食事を用意する。⑧の場面の女への弔いは『呉越』では女の家がわからず、仕方なく川に百金を投げ入れ、その後、女を弔い

に来た老婦が事情を知り、川から百金を受け取って帰ったことを記すが、変文ではその後の部分は割愛する。[19] 変文は必要に応じて設定を変え、枝葉を切り捨て単純化している。

先行文献にみえず、変文が新たに創作したと思われるのは、③⑧の姉と甥、④⑨妻、⑧の梁王のもてなし、⑩の呉王の夢解きに関するエピソードである。子胥が呉に入るまでに出会う人物として親族を登場させ、新しい見せ場を加えたのである。②の姉と甥の場面には甥と子胥の道術比べ、④の妻の場面には薬名詩という趣向を加え、諧謔性を加味したものと考えられる。悲壮感あふれる逃走場面に、少し面白みを加える演出をねらったものと考える（後述）。

変文は、前半で潁水の女、姉と甥、妻、漁師を登場させ、後半で⑥楚に勝利し呉に帰還する道で、父と兄をの霊を祭り、⑦漁師の子に免じて鄭王を許して漁師に報い、⑧潁水の女を弔い、甥に報復し、⑨妻と和解するという団円を用意する。⑧の梁王の登場は、子胥を梁の臣に設定していたことによるもので、梁王の兵士への歓待に免じ梁王を許している。前半の登場人物は後半でも登場し、大団円となるのである。

最後の⑩呉と越の場面では、子胥は父の伍奢と同じように佞臣を信じた王から死を賜り、呉滅亡の予言を残し自死する。そして子胥の言葉通りの結末となり、伍子胥物語は終結を迎える。変文では子胥が死を賜る契機は、呉王の夢解きである。『呉越』夫差内伝第五に呉王が夢を太宰嚭と公孫聖に解かせ、公孫聖の夢解きに激怒して、公孫聖を殺害した話がみえる。[20] 夢の内容は異なるが、変文作者はここから着想を得たのかもしれない。

変文は子胥を中心に物語を展開させるために、従来の故事を時に改変し、時に新しく創作したエピソードを加え、単純明快な筋立てと聴衆を飽きさせない工夫をしているのである。

三　演芸としての特徴

（1）語りの特徴 ―― 多彩な語り口と繰り返しのパターン

伍子胥変文の前半（①～⑤）と後半（⑥～⑩）では、その語り口が異なる。前半の逃走場面では、大半は四六句からなる駢体で、時に押韻を伴う賦体に変化し、女、妻、姉と甥、漁師と巡り会いの中で、子胥の悲壮感にあふれる情感が悲歌、剣歌として七言詩で歌われ、「按剣悲歌而歎曰…悲歌以了…」「遂作悲歌歎曰…悲歌已了…」などきまり文句もみえる。[21] 悲歌のみならず、情景の描写や子胥の言動や心の動き、登場人物との会話が七言の詩体になることもあり、その語り口は自在で変化に富み多彩である。後半もやはり四六句の駢体を主とするが、詩体は少なく、詩体は楚への進軍（七言八句）、漁師の子の船歌（五言六句）女への弔い（七言一六句）、呉への凱旋歌（七言一六句）のみであり、後半では、物語はテンポよく語られる。

前半部分の語り口の変化がわかるように、詩体、賦体の部分、詩の前後の言葉などを物語の進行順に書き抜いて簡単に示す。きまり文句は太字で示す。駢体を含む散文部分は、「↓」で記し内容は略す。

①使者の報告（七言詩一〇句）、楚帝の怒り（賦体）↓捕縛の勅（賦体）↓「子胥行至莽蕩山間、**按剣悲歌而歎曰**、（七言詩一二句）」②「**悲歌以了**、更復前行、信業随縁、至於潁水」↓子胥と女の出会い（七言詩一六句）↓食を勧める女の言（七言詩八句）↓子胥の返事（七言詩一二句）・女の言と身を投げの情景（七言詩二四句）③「子胥哭已、更復前行」逃走場面（賦体）↓姉と子胥の会話（七言詩一八句、五言詩四句）↓道術比べ（賦体）↓④一軒家に食を求める（七言詩、語り八句、妻の言葉八句、子胥の言葉一二句）↓（駢体の薬名詩）↓妻の心情と子胥の嘘

（七言詩三〇句、語り二句、子胥の言八句）→⑤「遂至呉江北岸、慮恐有人相掩、潜身伏在蘆中、**按剣悲歌而歎曰**（七言詩二〇句）」「**悲歌以了**、行至江辺遠眄」→「忽見魚人覆船而死、子胥愧荷魚人、哽咽悲啼不已、**遂作悲歌歎而曰**」（七言詩八句）、「**悲歌已了**、更伏（復）前行」逃走場面（賦体、四字句）→「思憶帝郷、**乃為歌曰**（七言詩二八句）」「**悲歌已了**、逃走場面（四字句、賦体）、**剣歌已了**」→　即至呉国。

各場面の終結部は、①②④は七言詩で情感や情景を歌い上げ劇的にしめくくり、③は賦体で甥たちが、子胥の術にはまる光景がコミカルに語られ（後出）、⑤は故郷を思う長い悲歌の後、剣を手に苦難の道をもろともせずに、呉へと向かう子胥の姿を軽快に語る。各場面のクライマックスを効果的に演出する語りのスタイルが選択される。

ここに⑤の終結部分を引用する。この部分にはP二七九四vの加筆が多く、加筆部分を〔　〕で記す。

我所思兮道路長、渉江水兮入呉郷。父兄冥莫知何在、遷（零）丁遣（遺）我独栖（悽）惶。…（中略）…願我平安達前所、行無滞碍得通流。儻若呉中遇明主、興兵先斬魏陵頭。悲歌已了、由懐慷慨。北背楚関、南登呉会。厲（属）逢天暗、雲陰霧黤（黮）、失路傍徨、山林摧滞。怪鳥成群、虫狼作隊。禽号姓ゝ（狌ゝ）、獣名狒ゝ。忽示（尒）心驚、抜剣即行。〔匣中光出、遍野精明、中有日月、北斗七星。〕心雄慘（熾）烈、不懼千兵。〔平王捉我、事未消寧、〕儻被擒獲、百死無生。〔偷蹤竊道、飲気吞声、風吹草動、即便蔵形。〕剣歌已了、更復前行。〔北跨広陵、南登呉会、関津忽（急）切、州懸（県）厳加、勒鋪交横、鎮戍相続。潜身避影、〕一歩一前、不経旬月之間、即至呉国(22)。

わが思う故郷道のり遠く、呉江を渡り呉郷に入る。父兄は冥莫いずこにあるや、一人残され孤独がさいなむ。…願わくは無事たどりつき、支障なく通れるように。もし呉にて明主に遇えば、兵を興し魏陵の首をう

ち取らん。悲歌終わり、慷慨いだき、北は楚関を背に南は呉会へと向かう。たちまち天は暗く雲たなびき、道を失い山林に倒れ込む。怪鳥群れ成し、獣は隊成し、狌狌とやら、狒狒とやら。ふと心乱れ、剣を抜きつき進む。〔鞘から光があふれだし、一面の野は明るく照りはえ、中に日・月、北斗七星あり。心激しく奮い立ち、千兵をも懼れない。〔平王我を捕らえようも、そうは事は運ばない。〕捕らえられれば、一巻の終わり。〔抜け道を行き息をひそめ、風が吹き草が動けば、すぐ身を隠す。〕剣歌終えて、更に進む。〔北は広陵をこえ、南は呉会に登り、関も津も緊迫し、州県は厳重警備、巡視はひっきりなし、兵営は至る所。[23]身をひそめ、一歩一歩、ひと月たたぬ間に呉国に到着する。

（2）諧謔性 ―― 道術比べと薬名詩

③の甥と子胥の道術比べの場面と④の薬名詩の場面を引用する。

③の終結部の甥が追ってくるのを予見した子胥が術を使って逃れる場面。

行得廿余里、遂乃眼瞤[24]、画地而卜、占見外甥来趁。用水頭上攘之、将竹挿於腰下、又用木劇（屐）到（倒）着、並画地戸天門、遂即臥於蘆中、呪而言曰、捉我者殃、趁我者亡、急ゝ如律令。子胥有両箇外甥、子安子永[25]、少解陰陽、遂即画地而卜、占見阿舅頭上有水、定落河傍、腰間有竹、塚墓城（成）荒、木劇（屐）到（倒）着、不進傍（彷）徨。若着此卦、必定身亡。不假尋覓、廃我還郷。子胥屈節看文、乃見外甥不趁、遂即奔走、星夜不停[26]。

二十余里ほどゆくと、目がぴくぴくし、地面に描いて占うと、甥が追ってくると出た。頭から水をかぶり竹を腰にさし、木下駄を逆さにはき、天門地戸を描いて、蘆の中に伏せ、呪文を唱える。「我を捕らえる者に

禍を、我を追う者は滅びよ、急急如律令。」子胥の二人の甥、子安子永は陰陽を少し解し、地に描いて占うと、叔父の頭に水があり、きっと河に落ちたもの、腰に竹があり、墓が荒れ果てること、木下駄をさかさまに履くは、前に進まずということ。この卦によれば、きっと死んでいる。探すは無用とすておき、家に戻って行った。子胥は腰をかがめ卦をみて、甥は追わずとあり、日夜ひたすら先を急いだ。

④夫と思う妻とそれを認めぬ子胥との会話。薬名詩は薬の名を用いた語呂あわせで言葉遊びの一種であり、唐代にはかなり流行していた。[27] 妻の言葉の一部を引用する。傍線部は薬名である。

妾是仵茄（五加）之婦細辛、早仕於梁、就礼未及当帰、使妾閑居独活。…（中略）…聞君乞声厚朴、不覚躅躅君前。謂言夫壻麦門、遂使蓯蓉緩歩。看君龍歯、似妾狼牙。桔梗若為、願陳枳殻。

私は伍家の嫁・細辛、（夫は）早く梁に仕え、婚礼あげたが帰ってこない、私は一人寂しく暮らす。…君の乞う声厚朴で、思わず前にたちもとおる。夫が帰って来たかと思い、従容として歩み寄る、みれば君のその龍歯、我が郎君の歯に似たり。胸の内はいかばかり、どうか思いをお聞かせください。[28]

以上の他にも③の姉が弟に差し出した食事の意味を解いたこと、[29] ⑩の呉王の夢解きなど、謎解きや占いの類を盛り込み、聴衆を楽しませる工夫がみえる。また、変文に俗諺や故事成語などが多用されているのも諧謔的効果を狙ったものと思われる。

おわりに

伍子胥変文を語りの演芸としてみると、筋立てがわかりやすく、各場面に山場が用意され、随所に聴衆を楽しませる仕掛けを盛り込んだ、娯楽性あふれる作品になっていることがわかる。その多彩な語り口から、この当時の伍子胥語りの流行を想像する。変文のエピソードの大半は、先行の文献に記載される内容であるが、変文にしかみられないモチーフもあり、変文作者の存在が問題となる。また、加筆潤色のある鈔本の存在が何を意味するのか、鈔本のレベルの違いなどについても今後の課題としたい。

注

（1）伍子胥故事については顧永新「伍子胥故事叢考」（『国学研究』第一〇巻、北京大学出版社、二〇〇二）があり、李寿卿「説専諸伍員吹簫」を中心にして出典をあげる。

（2）『敦煌変文論文録』下冊（上海古籍出版社、一九八二）再録。

（3）蘇瑩輝『敦煌論集』（台北、学生書局、一九八三）再録。

（4）中国語訳に蔡振念訳「伍子胥変文及其来源（上・中・下）」（『中華文化復興月刊』（台湾）（上）一六‐七、（中）一六‐八、（下）一六‐九、一九八三）。

（5）張栄芳「趙曄与《呉越春秋》」（張栄芳『秦漢史論集』広州、中山大学出版社、一九九五）参照。

（6）王重民等『敦煌変文集』（北京人民出版社、一九五七初版、一九八四重版）の刊行以来、その録文に関する校記の類が多く発表され、その多くは黄徴・張涌泉『校注』、項楚『選注』に取り込まれる。

（7）この鈔本の紙背に「列国伝」の文字があり、『英蔵敦煌文献（漢文仏経以外部分）』（四川人民出版社）ではこれを「背題」とするが、『校注』（一七頁）に栄新江氏の調査では背題はペンで書きで原巻の背題でないと記す。

（8）敦煌研究院編『敦煌遺書総目索引新編』（中華書局、二〇〇〇）は「釈子賛頌文」と題し、『法国国家図書館蔵敦煌西域文献』では「釈門文範」と題す。『校注』（一七頁）によると、紙背に祭文五篇が書写され、そこに「甲子」の紀年があり

吐蕃占領期の書写としている。

（9）『左伝』昭公十九年「鄖陽封人之女、奔之生大子建。及即位、使伍奢為之師。費無極為少師、無寵焉、欲譖諸王曰、建可室矣。王為之聘於秦、無極与逆勧王、取之。正月、楚夫人嬴氏至自秦」。

（10）S六三三一に「詐作慈父之書」とある。

（11）李正宇「敦煌地区古代祠廟寺観簡志」（『敦煌学輯刊』一九八八―一・二）

（12）列伝「追者在後。至江、江上有一漁父乗船、知伍胥之急、乃渡伍胥。伍胥既渡、解其剣曰、此剣直百金、以与父。父曰、楚国之法、得伍胥者賜粟五万石、爵執珪、豈徒百金剣邪。不受」「及呉兵入郢、伍子胥求昭王。既不得、乃掘楚平王墓、出其尸、鞭之三百、然後已」「乃使使賜伍子胥属鏤之剣、曰、子以此死」「（子胥）乃告其舎人曰、必樹吾墓上以梓、令可以為器、而抉吾眼懸呉東門之上、以観越寇之入滅呉也。乃自剄死」。

（13）①⑤⑥の場面は『呉越』王僚使公子光伝第三の「五年」の項。⑩は夫差内伝第五の「十三年」の項。本稿では四部叢刊所収『呉越春秋』を用いる。

（14）『呉越』に「子胥曰請丈人姓字。漁父曰今日凶凶両賊相逢、吾所謂渡楚賊也。両賊相得、得形於黙。何用姓字為。子為蘆中人、吾為漁丈人。富貴莫相忘也」とあり、変文では子胥に姓名と故郷を問われた漁師の返事に「今日両賊相逢、何用称名道姓。君為蘆中之事（士）、我為船上之人。意義足亦可知、富貴不須相忘」とある。

（15）『呉越』は「潁水」でなく「瀬水」。女の話は王僚使公子光伝第三の「五年」、⑦漁師の子の話と女の弔いの話は闔閭内伝第四の「九年」、呉が越に粟を送り越が蒸した粟を返した話は勾践陰謀外伝第九の「十三年」にみえる。

（16）鄭を討つ話は史記にもあり、列伝「白公勝既帰楚、怨鄭之殺其父、乃陰養死士求報鄭」とある、白公勝は平王の太子建の子である。

（17）金文京「読書ノート「伍子胥列伝」と「伍子胥変文」」（前掲）は、変文では「水」と「剣」が重要な意味をもち、そこに神話的な性格が表れていると指摘し、伍子胥と水神信仰と剣との関連を述べ、「江神」の登場や子胥が人と出会う場所が常に川べりであること、子胥は様々な場面で「剣」を手にすることなどから、伍子胥には「水」と「剣」のイメージがあることを指摘する。

(18) 王三慶『敦煌類書』（高雄、麗文公司、一九九三）四七四頁のP五〇〇二「北堂書抄体丙」の 323-00-25 に「張伯達不憚子胥之神、王少林不畏黧亭之鬼。伍子胥死、化為江中潯濤之神、…」とある。

(19) 王三慶『敦煌類書』二二一頁「類林、報恩 221-25-03」に『呉越』と同種の記事がある。

(20) 変文の⑩越軍の出陣の場面に勾践が路で怒る蛙を馬から下りて抱き（「路逢一怒蝸（蛙）、下馬抱之」）兵士の士気を鼓舞した話があり、『呉越』勾践伐呉外伝第十の「二十年」に「道見黿張腹而怒、将有戦争之気、即為之軾」とあり、ここから着想を得たのかもしれない。David Johnson 参照。

(21) 金文京「敦煌変文の文体」（『東方学報（京都）』七二冊、二〇〇〇）参照。

(22) この部分の韻字は長・郷・惶は平声宕摂、流・頭は平声流摂、慨・会・黵（黵）・滞・隊は去声蟹摂、明・星・兵・寧・生・声・形は下平声、梗摂。

(23) 原文「勒鋪」は『選注』では「駐兵巡防之処」、「鎮戍」は「屯兵守境之処」と注する。

(24) P二七九四vは、この後に「耳熱、遂即」の字あり。当時「眼瞤」「耳熱」は何かの予兆だと信じられ、予兆による占いも敦煌文献にある。高国藩『敦煌民俗学』（上海文芸出版社、一九八九）、『敦煌古俗与民俗流変』（南京、河海大学出版社、一九八九）、『敦煌民俗資料導論』（台北、新文豊出版公司、一九九三）、黄正建『敦煌占卜文書与唐五代占卜研究』（楽苑出版社、二〇〇一）参照。

(25) P二七九四vは「子安子永」の後「至家有一人食処、知是胥舅、不顧母之孔懐、遂即生悪意奔遂（逐）、我若将見楚帝取賞、必得高遷。逆賊今既至門、何因不捉。行可十里、遂即息於道傍、子永」より詳細に描写する。

(26) 後半は賦体、韻字は陽・傍・荒・徨・亡・郷、平声宕摂。

(27) 田中謙二「薬名詩の系譜」（薮内清・吉田光邦編『明清時代の科学技術史』京都大学人文科学研究所、一九七〇）参照。

(28) 薬名がどんな語になぞらえているかは、祝鴻烈・褚良才「《伍子胥変文》薬名詩臆詁」（『敦煌語言文学論文集』浙江古籍出版社、一九八八）、『校注』、『選注』、入矢訳など参照。

(29) 原文「葫蘆盛飯者、内苦外甘也、苦芭為薑（齏）者、以苦和苦也。義合遣我、速去速去、不可久停」。